

「台湾人」意識の成立をめぐる

川原 絵梨奈

はじめに

現代台湾の社会を研究する場合、アイデンティティの対立とそれに結びつくイデオロギーの問題は、ディシプリンを問わず議論が繰り返されている。とりわけ歴史学の領域では、日本による植民地統治や国民党・国民政府の権威主義体制のもとで、国民統合政策への反発に起因したエスニシティの意識化と政治化、それに関連する民主化運動に着目した研究が積極的におこなわれてきた。

これらの議論では、エスニシティの問題、現在の中国と台湾との関係のあり方、また東アジアにおける台湾の国際的な地位、およびナショナリズムの問題を検討している。つまり国民国家という枠組みで台湾社会を捉えることに重点が置かれ、民主化にともなう活動やエスニシティの言説を、台湾史の中に位置づけているのである。だが一方で、独立を求めるか否かといった「国民」としての政治的な選択を自ら拒否するような個別の意識については、一面的に解釈したり見落とししたりしがちなのである。

評者は、2004年の台湾総統選挙におけるメディアの論調とその議論に着目し、90年代以降エスニック・グループの意識化とともに積極的に唱えられてきた「新台湾人」の言説を再検討した（川原 2009）。そして「新台湾人」の言説が一部のメディアの議論と共鳴するかたちで、学界にも台湾独立をどう捉えるのかという政治的な問題を突き付け、統一もしくは独立の選択を迫る議論がなされていることを指摘した。上記の言説の中には、本省人の台湾独立を指向する意識と、外省人を中心とする大陸中国へのアイデンティティを重視する立場とを対立的に捉えているものもあった。

しかし、「新台湾人」の定義、すなわち出自や省籍を問わず、台湾に生まれ育った経験を持つ人は全て「新台湾人」という言説には、1970年代の「台湾人」意識をめぐる議論で指摘された点と重複する部分が存在している。そ

のため、「新台湾人」とは、すでに語られてきた議論を政治的に復唱したの
とも言え、その起源と内容を確認するためにも、1970年代から80年代の「台
湾人」意識の形成過程を検討する必要があるだろうと評者は考えている。そ
こで本稿では、1970年代における「台湾人」意識の形成過程に関する研究動
向を①台湾の「本土化」、②歴史的文脈からのアプローチ、そして③「郷土文
学」と「モダニズム文学」の隆盛、という視点から整理したい。

1. 1970年代における台湾の社会状況

研究動向の整理の前に、1970年代の台湾社会の状況を理解するため、こ
こでは若林正文の議論を紹介する（以下は、〔若林 2008〕による）¹。

台湾は、1960年代に急速な経済発展を遂げながらも、国際連合脱退に伴う
国際社会における地位の低下、および「釣魚台」問題に伴うナショナリズム
の高揚などを経て、次第に国民党政府への批判と変革意識が高まってくる。
しかしながら、政治的には、依然として国民党政府による一党支配が続いて
いたのである。

国民党は、自らが正統中国であることを権威づけるために、中華民国政府
が唯一中国を代表する正統政府であり、また文化的伝統を継承するという政
治的立場を主張していた。この中華民国政府が国民統合のイデオロギーとし
た「公定中国ナショナリズム」²に基づき、「中華民国」国民意識を奨励する
政策や教育が実施されていた。そのため、国民党は台湾の固有性を否定し、
また本省人への制度的差別を正当化したのである。

だが、1970年代になると、政策面での転換や国内情勢での変化がみられる
ようになった。具体的には、蔣経国が行政院長に就任した1972年に、本省
人を政権内に登用することで、政治の台湾化を進めた。さらに、1977年には、
後述する「郷土文学論争」が起こる一方、同年11月には2・28事件以来の
民衆暴動である中壠事件が発生するといった、台湾の民主化にとって重大な
出来事があった。

このような情勢の変化は、本省人、外省人を問わず台湾住民に国民党によ
る様々な「不条理」³と台湾の置かれた現実を再認識させた。そして、国民
党が提唱する中華ナショナリズムや「中華民国」国民意識とは違った、自分

たちの生きる台湾に根差した「郷土意識」が芽生えるようになった。この「郷土意識」の高まりとは、台湾人のための台湾の歴史の掘り起こし、日本統治時代の台湾人作家による日本語文学や知識人による民主化運動の歴史を積極的に評価することなどに見られる。また、のちに民進党を立ち上げる党外人士らが台湾ナショナリズムおよび台湾人意識に基づく政治活動を活発化し、選挙の実施と言った具体的な政治変革を求めるようになったのも、この時期であった⁴。

上記の若林の議論に基づき、評者は少なくとも 1970 年代以降、省籍を問わず台湾の人々が社会意識を深め、また民主主義を求める世論と運動も活性化し、国民党も台湾化を本格化させ始めたと考えている。以下、この点を前提に、動向整理を行う。

2. 台湾の「本土化」

ここでは、国民党権による台湾の「本土化」に関する研究を整理する。台湾の「本土化」とは、大陸中国の正統な政権であるというフィクションを維持してきた中華民国が、「台湾国家」であると自己認識する動きとそれに伴う様々な影響をさす。

林泉忠は、1970 年代の国民党の本土化政策について着目している。そのなかで、「本土化」政策の決定要因とは、①国連脱退やアメリカの対中国政策への転換などの外交危機②アメリカによる民主化への圧力、③大陸反攻が不可能になったこと、④本省人中産階級の出現、であるとす。そのなかで、中産階級の出現は、少数派の外省人が多数派の本省人を制度的に差別しているという「省籍矛盾」の解消を促す側面があったことを指摘している。具体的には、政界や軍に本省人を積極的に登用することで、従来の「省籍矛盾」は緩和されたが、一方で外省人と本省人の権力の逆転に生じた外省人の危機感に由来する新たな「省籍矛盾」が生成された（林 1998）。

「省籍矛盾」問題と密接に関連して、1970 年代以降に議論され始めたのが、族群をめぐる問題である⁵。例えば、政治意思の決定に際して、人口において多数派である閩南人の意見は相対的に反映されやすい。このため、客家人や「原住民」、または外省人などの少数派である族群にとっては、自分たちが

多数派に置き去りにされるのではないかという危機意識が生じると同時に、彼らによる自己主張を助長し、ことさらに族群間の政治対立を煽るという問題もある。その中で、台湾社会が大きく変化した 1970 年代以降、人類学者は、少数派である「原住民」の不利な状況に目を向け始めた（王 2007）。

菅野敦志は、文化復興委員会（菅野 2005a）および蔣経国により文化行政のトップへと配置された台湾人の陳奇祿の活動（菅野 2005b）に着目して、蔣経国の文化政策を分析し、以下の点を明らかにしている。

蔣経国はこの時期の社会変化に鑑み、部分的な「台湾性」、「郷土性」を意図する文化政策を実施した。これは国民党政府の事実上の「本土化」（台湾化）政策と言え、台湾住民における台湾ナショナリズム、「台湾人」意識化（中華民国台湾化意識）の高まりに伴い、政治空間においても台湾の「本土化」（台湾化）が組み込まれ、80 年代には主流となっていった。

3. 歴史的文脈からのアプローチ

近年、「台湾人」意識を形成する契機を、1970 年代以前からの歴史的連続性に求めた研究がある。例えば、若林正丈は、1970 年代に活発化する党外人士による民主化運動の高まりを、日本統治時代の抗日民族運動から続く、台湾における民族運動の発展の歴史であると位置付けている（若林 2001）。

また、蕭阿勤は、1970 年代の党外人士による日本統治時期に関する歴史叙述の書き換えについて詳細に分析している。彼らは、植民地期における抗日政治運動を「発見」し、それを反国民党運動の源流へと読み替えることで自己の政治的正統性を証明しようとした。また、蕭は、その主体となった彼らを台湾民族主義発展史における「中心世代（原語：「軸心世代」）」と位置付けている（蕭 2008）。

一方、自己の主体性の回復という側面から抗日運動を見ると、台湾での状況は、中国大陸のそれとは異なった様相を呈している。その点について、山口守は文学活動の点から以下のように説明する。台湾人作家による創作活動は、植民地台湾における自己回復運動の一環であり、自らの主体性獲得に向けた回路であった。しかし、そこには日本の植民地支配を契機とする言語の問題が存在していた。

植民地台湾では、公共空間の言語として日本語の使用を強制されたため、公教育や出版メディアの分野は日本語の影響を大きく受けた。そのため、台湾人作家が自己の内面を表現するためには、公共空間の言語である日本語と私的空間の言語である中国語ないしは台湾語とを使用する二重言語状態にならざるを得なかった。私的空間の言語を用いた場合、当局からの弾圧は必至である一方、公共空間の言語を使って台湾の特殊性を表現しようとした場合、日本語に台湾的な世界認識や感性を織り込まざるを得なかった。

そのため、台湾人作家たちは創作活動を続けるために、台湾語の要素を含む「新たな日本語」を「創作」することで、日本語文学を作り出した。すなわち、植民地出身の作家は、日本文学の模倣や受容を通じた文学体験を行い、中国文学とも日本文学とも異なる新たな文学を作り出した（山口 2006）。

その結果、1970年代には、戦前の日本語文学の掘り起こしを通じて、台湾独自の文化や台湾人意識の固有性が再認識され積極的に評価された（何 2003）。しかしながら、これらの議論は独立論に立脚した政治的イデオロギーの文脈のなかでメディアにより利用され、台湾の権力闘争と結び付けられ易い傾向もある。

また、丸川哲史の研究は、東アジア全体の歴史的な文脈の中で「台湾人」意識の形成過程に着目した例として挙げられる（丸川 2010）。その中で、台湾は東アジアにおける科挙ネットワークに組み込まれた、中国の古典文化構造圏内にあったという史実に基づき、大陸中国と台湾の歴史的な関係性とその影響を指摘する⁶。その関係性は、大陸中国と海を隔てた地理的な断絶と日本による台湾統治支配という政治的断絶があるものの、辛亥革命、五・四運動、国民革命と続く中国の近代化、さらに日本の大正デモクラシーと連動するかたちで、台湾の抗日民族運動もまたその思想的な影響を受けていたとする。つまり、台湾の民族運動は中国の近代化に共鳴していたと述べている。そこから、戦前の抗日運動とは、自分たちは中国人であるという中国ナショナリズムおよび中国人意識に基づいた支配への抵抗であったと位置付けている。丸川は、これらの議論における「台湾人」意識の中では、中国人としての民族意識と、台湾の固有性を主張する独立派や台湾ナショナリズム支持者の唱える「台湾人」意識との間に矛盾はなかった、と指摘している。さらに

丸川は、1970年代から80年代にかけて大陸中国との間にある物質的近代化の壁と民主化の壁も「台湾意識」を構成する基本条件となった、と言う。

4. 「郷土文学」と「モダニズム文学」の隆盛

文学分野でも、1970年代には「台湾人」意識の形成に関する議論が起こった。その代表的な事例が、「郷土文学論争」である。この論争に関する代表的な先行研究に、陳正靄の研究が挙げられる（陳 1981）。陳は「郷土文学」とは社会思想面での民衆の生活への関心における、民族性・社会性を貫いていた「土地と人民」への志向が高まる中で起こったと述べている。その背景には、70年代の国際情勢の変動、農村経済の疲弊や労働災害などの問題及び社会大衆の生活に対する関心、外国への経済的依存に対する問題意識、過度の西洋化・現代主義的傾向を排し、「帰属性」をもった文学を望む声が強まったことがある。また陳は、「郷土文学」における「郷土」をめぐる議論が、70年代の社会改革意識の高まりと、それに伴う文学での社会意識の強調および「反抗」をめぐる側面の増大を、省籍をこえて人々に意識させた、と指摘する。

（許 2008）は、上述の議論に加え、郷土文学論争には、国民党政府と「郷土文学」の提唱者との間に政治と文学をめぐる駆け引きが存在した、と指摘する。許によれば、国民党はプロレタリア文化大革命終焉後の中華人民共和国の「統一戦線」工作などの政治動向に対抗して、「郷土文学」を「愛国主義」に関する議論に転換し、「郷土文学」提唱者を自陣営に取り込むことで、政権の「反共」姿勢を維持するために利用したのである。つまり、国民党政府による公定ナショナリズムの枠内に文学論争を位置付け、台湾の中華人民共和国への統一の議論を封じたのである。

一方、「郷土文学」と対極に位置づけられる「モダニズム文学」においても、同様の潮流があったとされる。例えば、山口守によると、「モダニズム文学」の代表的な雑誌である『現代文学』に参加していた若い世代の作家たちは、当時の台湾社会と向き合いながら社会に対する現実感を持っており、モダニズム作家による「自己探求」を契機とした「台湾意識」が育ち始めたと述べている（山口 2003）。

具体的には、山口は「モダニズム文学」の作家たちは、60年代の国民党言論統制により、五・四運動以降の中国近代文学や戦前期台湾の文学を継承する道を閉ざされながらも、中国古典文学を近代的文脈のなかで解釈し、また西欧文学を受容することで、自分たちの喪失感を作品化した。それは、国民党の公定イデオロギーである「中国ナショナリズム」に裏打ちされた、中国伝統文化の強調を克服する手段であり、また現実の台湾社会とは距離を置いたモダニズムの実験であった。とはいえ彼らの作品は、単なる現実逃避ではなく、「中国ナショナリズム」を核とする権力言説への反抗の意味での作品であり、当時の台湾社会と向き合いながら彼らなりの方法で社会に対する現実感を保っていた。そして、省籍を越えた人々の間で議論がなされていたのである。また、そこに加わっていた作家の中には、70年代に郷土文学作家として活躍していくものも含まれていた。筆者なりに敷衍すれば、「モダニズム文学」は「郷土文学」の誕生を準備したといえ、両者が現実の台湾を意識しながら自己のアイデンティティを回復しようとした点で、いわば相関関係にあったと言えるだろうとしている（山口 2003b）。

おわりに

本稿では、台湾の1970年代から80年代にかけて認識されるようになった「台湾人」意識の形成過程とその背景に関する研究動向を整理した。本稿の検討から、「台湾人」意識は1970年代の社会情勢の変化により、台湾で生きる現実を振り返る過程において、人々のなかに芽生え定着した意識であることがわかる。また「台湾人」意識をめぐる議論とは、省籍のみならず歴史、政治、文学といったディシプリンを越えた議論であった。

本稿を終えるにあたり、「台湾人」意識を研究するうえでの今後の課題について、1点に限定して指摘しておきたい。

1970年代に発生し始めた「台湾人」意識を受け入れたのは、60年代の経済発展の中で勃興しつつあった中間階層であったことは既に指摘されており、後の民主化運動の主体となった存在でもある（劉 1987）。さらに、彼らの政治性は、日常の生活感覚の中から発生すると考えられる。すなわち、彼らの日常生活に関する側面を検討することで、「台湾人」意識の形成における新た

な知見を示すことができるのではないかと評者は考える。そのため、個別具体的な事例の収集と検討が課題となると言えよう。今後は先行研究の成果に学びつつ、この問題についてディシプリンを超えた視点で、総合的に考察する必要があるだろう。

注

- 1 評者は「台湾人」意識の形成過程を、台湾の民主化との関連のなかで捉える点において、若林の議論を議論の前提としている。しかしながら、たとえば文学研究では、「帰属意識」の在り方をめぐり、1970年代を重視しながらも、1960代との不可分性が指摘されている〔山口 2003〕。とすれば、山口らの研究を参照しながら、若林の議論を改めて検討する必要もある。というのも、1970年代の台湾をどう理解するのか、という問題が、「台湾人」意識に関する研究に大きな影響を与えており、この点をより深く検討する必要があるからである。だが、この点は今後の課題とせざるをえない。
- 2 若林は「公定中国ナショナリズム」という表現について次のように述べている。「中華民国とは、清帝国の領域を引き継いでそこに近代国民国家を建設しようとする中国ナショナリズムのプロジェクトの産物であり、その中心と周縁の関係に着目すれば、近代の植民地帝国とは形成径路は異なるが一種の「国民帝国」であり、その点で国家権力による国民統合イデオロギーとしての中国ナショナリズムもまた公定ナショナリズムと性格づけられるものといえる。戦後台湾の中華民国は、中国大陸における広大な周縁地域を失ったものの、「反共復国」の国策とともにそのイデオロギーは保持した」と言える。(若林 2008 ; 416)
- 3 若林は、台湾社会における国民党政府による政治的不条理について、台湾社会しか統治していない国家が正統中国国家の態勢を維持する不条理、その政府が国際社会で「中国」を代表し続ける不条理、「大陸反攻」できない国家がそれを名目として政治抑圧と不平等を維持し続ける不条理、台湾海峡の「アメリカの平和」は保持されているにも関わらず中国内戦の戦時態勢が政治制度に恒常化されたままである不条理などを指摘している。(若林 2008 ; 6-7)
- 4 国民党当局と党外人士による代表的な衝突に、美麗島事件 (1979年) が挙げられる。
- 5 族群とは、エスニック・グループの訳語であり、文化人類学の用語である民族 (ethnos, ethnïe) に相当する。台湾では、外省人、客家人、福佬人、そして「原住民」の4つの族群が設定されている。
- 6 松永正義もまた、台湾を考える上で、前近代中国との関係性を無視できないということを指摘している (松永 2008)。

文献一覧

- 王甫昌（田上智宣訳）2007「現代台湾における族群概念の含意と起源」『日本台湾学会第9回学術大会記念講演』
- 何義麟 2003『二・二八事件「台湾人」形成のエスノポリティクス』東京大学出版会
- 川原絵梨奈 2009「『新台湾人』の議論と政治意識をめぐって」、『アジア社会文化研究』第10号
- 菅野敦志 2005a「中華文化復興運動にみる戦後台湾の国民党文化政策」『中国研究月報』59（5）
- 菅野敦志 2005b「戦後台湾における文化政策の転換点をめぐって—蔣経国による『文化建設』を中心に」『アジア研究』51（3）
- 許菁娟 2008『台湾現代文学の研究——統戦工作と文学：1970年代後半を中心として』晃洋書房
- 蕭阿勤 2008『回帰現実—台湾1970年代的戦後世代與文化政治変遷—』中央研究院社会学研究所
- 陳正醜 1981「台湾における郷土文学論戦（1977—1978年）」、『台湾近現代史研究』第3号
- 松永正義 2008『台湾を考えるむずかしさ』研文出版
- 丸川哲史 2010『台湾ナショナリズム 東アジア近代のアポリア』講談社
- 山口守 2003a「呉濁流と郷土文学」、同編『講座 台湾文学』国書刊行会
- 山口守 2003b「白先勇と60年代モダニズム」同編『講座 台湾文学』国書刊行会
- 山口守 2006「植民地・占領地の日本文学—台湾・満州・中国の二重言語作家」
- 藤井省三編『岩波講座「帝国」日本の学知 第5巻 東アジアの文学・言語空間』岩波書店
- 林泉忠 1998「台湾政治における蔣経国の『本土化』政策」試論—「省籍矛盾」の緩和と解消を中心として（1972～1991）」、『アジア研究』44（3）
- 劉進慶 1987「ニックスの発展と新たな経済階層—民主化の政治経済的底流」
- 若林正文編『台湾—転換期の政治と経済』田畑書店
- 若林正文 2001『台湾抗日運動史研究 増補版』研文出版
- 若林正文 2008『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会